

ヒンディー語における動詞複合について

—不定詞，未完了分詞，完了分詞の機能—

西 岡 美 樹

要 旨

本稿は、ヒンディー語の動詞複合に見られる4つの形態（語幹，不定詞，未完了分詞，完了分詞）のうち，非定形節の埋め込みという統語処理で意味解釈の説明が可能な不定詞，未完了分詞，完了分詞の例を取り上げ，個々の例を分析する。目的は，非定形節の埋め込みによって成立するこの動詞複合の，意味解釈に反映されている統語的メカニズムを解明することにある。同時に，ヒンディー語学で説明される用法の妥当性を検証するものでもある。本稿の目次は以下の通りである。

1. はじめに
 2. 実例観察
 - (1) 不定詞
 - a) 直格形
 - b) 斜格形
 - (2) 未完了分詞
 - a) 直格形
 - b) 斜格形
 - (3) 完了分詞
 - a) 直格形
 - b) 斜格形
 3. 不定詞，および未完了分詞，完了分詞の特徴とその機能
 4. ま と め
- 引用文献
参考文献

キーワード：動詞複合，不定詞，未完了分詞，完了分詞，埋め込み文

1. は じ め に

ヒンディー語（Hindi）は，インド本国での国語の地位にはないが，北インド一帯のリング・フランカとしてその地位を確立している。インド国内で見ても，映像メディアを通してヒンディー語は南インドにまで達しており，実際，世界的に見ても話者数も多い。

現代ヒンディー語のいわゆる標準語といえば，カリー・ボーリーという方言を母体としている西部方言といわれる。以前はバナラシ（英語名はベナレス）周辺の東部方言であった。国の中心が移るにしたがって標準語が変わるのはどこでも同じで，ヒンディー語もその例に漏れ

ず、国の政の中心が西側に移動してからは、標準語といえばおおよそ西部方言のことを指す。

また、ヒンディー語は、隣国であるパキスタンのウルドゥー語 (Urdu)⁴⁾ と似通っているというが、共通なのは統語構造のみである。よく「文法」が似ているというが、これは統語構造のことであり、語彙については、ヒンディー語はサンスクリット出自の単語が比較的多く、ウルドゥー語はアラビア語もしくはペルシャ語出自の単語が頻繁に使用される。したがって、ヒンディー語はサンスクリット式の語形成を行い、ウルドゥー語はアラビア語もしくはペルシャ語式の語形成を行うので、形態論的に似ているとはいえない。さらに、文字についても語形成のことから想像に難くなく、ヒンディー語はデーヴァナーガリー文字 (Devanagari) を使用し、ウルドゥー語はアラビア文字 (Arabic) を使用する。

このように異なる点多々あるが、根本的に共通している点といえば、やはり統語構造にしぼられる。実際、本稿で扱うヒンディー語 (以下、ウルドゥー語と同一視可) は日本語と同じSOV語順のことばとされているが、それはあくまで単文の話である。これが複文になると、元々インド・ヨーロッパ語族のインド・イラン語派の流れにあるためか、英語やロマンス諸語で観察される関係詞節や同格接続詞節の語順に従う。したがって、ヒンディー語は純粹にSOV型のことばというわけではない。

とはいえ、SOV型の日本語との共通点もたくさんあるのは事実である。そしてその中の一つとして動詞複合を挙げることができる。この動詞複合というのは、二項以上の動詞が連続しているものを指すが、それが一見、動詞の連続体に見えていても、実際は、従属文の方を非定形節に変換して主文に埋め込んだものと、その連続体が意味領域に及び、別の語彙のように振舞う、いわゆる日本語の複合動詞のようなものに大別される。

もう少し詳しく説明すると、たとえば、日本語の「思い出す=思う+出す」のように、主な意味の動詞が最初に来る。これを第一動詞と呼び、「出す」の方を第二動詞と呼ぶが、これはどちらか一方では「思い出す」という意味が成立しないものである。しかし、「忘れる」が元となる「忘れてしまう」は、「しまう」がなくても成立する。前者のような語彙化したものを複合動詞と呼ぶが、後者の「しまう」を付けたものは語彙化しているわけではないので、複合動詞とは呼べない。

ここで注意したいのは、日本語の複合動詞の方は連用形「思い」とそうでない方は「一て」形が別々に使用されている点である。日本語には、動詞の非定形に連用形と「一て」形の2種類しかない。対するヒンディー語には、非定形の形態が、語幹、不定詞、未完了分詞、完了分詞の4つ存在する。そして、語幹で複合するものが意味領域に及ぶ、複合動詞なのだが、残りの不定詞、未完了分詞、完了分詞については、統語構造上の埋め込み操作での処理が可能なものとなっている。

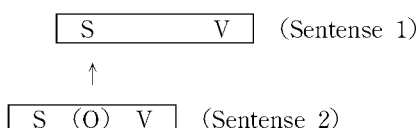
本稿では、この統語構造で処理が可能な非定形の不定詞、未完了分詞、完了分詞に焦点を当て、これらが実際、どのような特徴をもっているか、統語構造がもつ論理構造がいかにそれぞれ

れの構文とその意味解釈に反映されているかを、様々な例文²⁾を挙げながら、観察、分析をしていく。

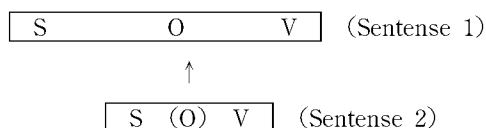
2. 実例観察

実例観察の前に、ここで必須となる主語型埋め込み、目的語型埋め込みについて、若干の説明をしておきたい。

【主語型】



【目的語型】



主語型の場合、母体文の文1 (Sentence 1) の主語の位置に、文2 (Sentence 2) が非定形節となって埋め込まれる。目的語型の場合、主語型と同様に、主文の目的語の位置に別の文、すなわち文2が埋め込まれる。その際、埋め込まれる非定形節の動詞の形態が、不定詞、未完了分詞、完了分詞となる。

また、その不定詞、未完了分詞、完了分詞には、直格と斜格という2つの形態が存在する。通常、これらは名詞の形態の名称で、性・数以外の語形変化がない主格・対格を直格、それに対し、後置詞が付く時に語形変化を伴う後置詞格全般が斜格と呼んでいる。形容詞、動詞についてもその名詞と一致を起すものを直格形、それに対して、名詞との一致を起さないものを斜格形と呼んでいる。したがって、動詞の非定形である不定詞、未完了分詞、完了分詞も、直格形が非定形節として主文に埋め込まれた場合、主文の主語に支配され、性・数一致を起す。対する斜格形は、主語に支配されることはない。特に未完了分詞、完了分詞には、日本語の「テレビを見ながらご飯を食べる。」や「箸をもったまま席を立った。」の「ながら」や「まま」のような副詞句的な働きをするものがあるが、これは動詞複合の範疇にはないので、本稿では扱わない。

以上に注意しながら、以下で実例を観察し、実際これらの不定詞、未完了分詞、完了分詞がどのような特徴をもっているかを分析していこう。

(1) 不定詞

a) 直格形

まず、不定詞の直格形を使った主語型の埋め込みの例を観察する。

(1) āp kī śaṃkā ko dhīraj se dūr karnā merā farz hai.

あなた の 疑念 を 忍耐 から 遠い する—不定 私の 義務 コー現在
「あなたの疑念を辛抱強く晴らすのが私の義務です。」

(2) jhūṭh bolnā acchā nahīṃ hai.

嘘 話す—不定 良い 否定 コー現在
「嘘をつくのは良くない。」

(1) は、「疑念を晴らすこと」という部分が、「AはBだ」という名詞Bが述語になった名詞述語文に埋め込まれている。同じ要領で、(2) は、「嘘をつく(こと)」というのが、「AはB」という形容詞Bが述語となった形容詞述語文の主語Aに埋め込まれている。

次は、非定形節が「BにAがある」という存在文に埋め込まれた例を見てみよう。

(3) mujhe jānā hai.

私に 行く—不定 コー現在
「私は、行かなければいけない。」

存在文の中の場所Bに人が代入されるこの構文を、一般的に与格構文という。与格構文は統語的にいえば、元々存在文がベースになっている。したがって、非定形節で埋め込まれる「行く」という命題が、その対象である「人」にとって「存在する」ということになる。これは一般に予定、義務等の意味を表すとされるが、もちろんそれだけではない。与格で表示されている人称が二人称になると、命令の意味合いが強くなる。

(4) bakkū! tumheṃ mere sāth calnā hogā.

バックー 君に 私の とともに 行く—不定 コー未来
「バックー、いっしょに来い。」

先の(3)のように話し手が自分自身についていえば、近い未来や予定、さらに発展して自分の意思や思い(願望)の表現になるが、この(4)のように自分以外の者に対して使うと、命令や強制の意味を表すことになる。

次に、コンピュータ動詞を使ったこの存在文によく似た例で、‘paṛnā’ という動詞を使ったものを挙げよう。原義は「ある／生じる」である。ただし、「ある」といっても、コンピュータ動詞が表すような、自然にそこに存在するという「ある」ではなく、誰かが置いたり落としたりした結果、そこに「存在する」、つまり他力を前提とし、そこに存在するという意味での「ある」になっている。これは、いわば「落とす」「置く」の中動態的な意味をもつ動詞だといえる。では、その動詞を使用した例はどのような意味になるだろうか。

- (5) pāpiyoṃ ko pāp kā daṃḍ bhognā hī paṛtā hai.
 罪人 に 罪 の 罰 耐える—不定 小詞 生じる—未完了 コー現在
 「罪人は、その罰を受けなければならない。」

(5) では、「罪を償う」が命題となって、‘paṛnā’ の主語として埋め込まれている。この場合、動詞の原義にある他力性が働き、自分の意思では避けられない事柄を示すものとなる。用法としては、強制や義務を表すといわれているが、実際、文自体は命題の不可避性を表しているのみで、それが文脈によって強制や義務の意味に使用されている。先ほどのコンピュータ動詞型のものも同じく義務を表すといわれるが、先に述べた通り、‘paṛnā’ を使うものとは自ずとニュアンスが異なるのである。

次に、原義が「来る」という動詞 ‘ānā’ を使った例を挙げる。

- (6) mujhe hiṃdī bolnī ātī hai.
 私に ヒンディー語 話す—不定 来る—未完了 コー現在
 「私はヒンディー語を話すことができる。」

(6) では、「Aが来る」の主語Aに「ヒンディー語を話す（こと）」という非定形節が埋め込まれている。これは原義の「来る」が転じて「できる」という意味になる。また、埋め込まれる非定形節が元々目的語をもつ場合、主文の与格構文では主語の働きし、不定詞も本動詞も、性・数一致を起こす。

主語型の最後に ‘cāhie’ を使用した例を挙げる。これは不変化詞として使用されるが、元々は ‘cāhnā’ 「欲する、必要とする」という動詞のアオリストで、祈願を表す形であったという [Platts: 420]。

- (7) kisī sāthī ko lānā cāhie.
 誰か 仲間 を 連れて来る—不定 不変化
 「誰か仲間を連れて来た方がいいな。」

‘cāhie’ は、祈願を表すということなので、原義としてこの不変化詞がもち合わせているのは「欲されん」という意味になる。必要もしくは義務のような意味をもつといわれ、日本語の形式名詞である「べき」³⁾を当てられることが多いが、そもそも「欲されん」に基づいたものだとすると、これは「～する方が好ましい」、つまり「～する方がいい」の表現に近い。ちなみに、名詞が主語になる場合、「Aが欲しい／必要」という表現になる。また、この文全体を命題として、さらにコピュラ動詞の過去形を付加すると、以下のように、「～しない方がよかった」もしくは「～べきではなかった」に当たる言い方となる。

- (8) manoraṃjan kī dr̥ṣṭi se bhī juā nahīṃ khelnā cāhie.
 娯楽 の 観点 から も 賭博 否定 遊ぶ—不定 不変化
 「娯楽としてでも、賭博はするべきではない。」

(8) は否定文の例だが、その場合、日本語の形式名詞「べき」に見られる「主観を超えた理のあることを納得して下す判断であることを示す。」(『広辞苑第四版』)を表す表現になる。訳語としては「しない方がいい」でも十分通用する。

次に、目的語型の例を挙げるが、「～するのを欲する／忘れる／・・・」という具合に枚挙に暇がないので、一例だけ以下に示す。

- (9) maim̐ hiṃdī sikhnā cāhtī hūṃ.
 私 ヒンディー語 学ぶ—不定 欲する—未完了 コー現在
 「私はヒンディー語を学びたい。」

(9) は「Bを欲する」のBに非定形節の不定詞が埋め込まれたものである。ただしこの埋め込みは、主文の主語と非定形節の不定詞の主語が一致する場合に限られる⁴⁾。

b) 斜格形

次に、斜格形を使用した、主語型の埋め込みの例を見てみよう。まず、‘lagnā’ という動詞を使用した例を挙げる。この動詞は様々な意味をもつといわれるが、原義は「付く、くっつく」の意味である。そして、この複合形式はいわゆる開始相になる。

- (10) cācā jī, baiṭhe-baiṭhe ālas āne lagā thā.
 叔父 敬称 座る—完了座る—完了 だるさ 来る—不定・斜 付く—完了 コー過去
 「叔父さん、じっと座ったままでいて、だるくなってきた。」

(10) の動詞 ‘*baiṭhnā*」「座る」の斜格形を二つ重ねる部分は、行為が完了した状態にあることを強調した副詞句になっている。ここで使用されている動詞 ‘*lagnā*」は、行為にとりかかることを表す。ただしいわゆる「始める／終わる」のような開始相、終了相というのではない。いってみれば、日本語の連用形+「かかる／だす」のように、行為に手をかけるような意味から転じて、「開始」の意味を表すタイプのものでよく似ている。したがって、特に必要のない限り、訳語に「～始める」を当てる必要はない。

次に ‘*jānā*」「行く」を複合する例を観察してみよう。これは、「野球の試合を見に行く」のような「～しに行く」という場合とこの「～しようとする」という場合の二通りのパターンがある。ここで挙げるのは後者で、日本語のそれとよく似た、眼前で起ころうとしている事柄やほぼ決定した未来の予定を叙述するのに使用されているものである。

- (11) *dhṛtrāṣṭṛ kuch kahne hī jā rahe the ki, ...*
 人名 少 言う—不定・斜 小詞 行く—語幹 続く—完了 コー過去 同格
 「ドリタラーシュトラが何か言おうとしたちょうどその時、…。」

実際 (11) のようなパターンは、英語の ‘*be going to inf.*」の類推ともいわれるが、英語の *to* 付き不定詞の副詞的用法と同様の働きをするものが、ヒンディー語の不定詞の斜格形に相当するだけで、特に取り立てて類推というものではない。

以上が主語型の埋め込みだが今度は目的語型の埋め込みとなる ‘*denā*」「与える」と ‘*pānā*」「得る」を使用した例を見てみよう。目的語型の場合、埋め込みの原理は主語型と同じだが、通常、非定形節の主語を対格表示し、動詞の部分は斜格形にする。

- (12) *binā anumati ke kisī ko bhītar na āne do.*
 なし 許可 で 誰も を 中に 否定 来る—不定・斜 与える—命
 「許可なしで、誰も中に入れるな。」
- (13) *koī bhī anumati ke binā bhītar praveś na karne pāye.*
 誰 も 許可 の なしで 中に入ること 否定 する—不定・斜 得る—過去
 「誰も許可なしに中に入れてもらえなかった。」

(12) と (13) では、ヴィシュヌ神本人の許可なしではヴィシュヌ神に会えないという文脈が前提としてある。(12) の日本語訳を見れば分かるように、これは使役文の相手に許可や同意を得て行為を行うものが、ヒンディー語ではこの複合形式によって表される。英語の ‘*to make/let someone go*」の ‘*make/let*」の役割をするのが、日本語では使役接辞「せる／させる」に当たる。それが「命題を作り出す」となって使役性を表すのだが、ヒンディー語の場

合, ‘make’ で表すような, 強制的な使役は日本語と同じく動詞語幹に使役接辞 ‘-vā’ を付けたものになる。‘denā’ という動詞を使うことで, 「AにBを与える」という論理構造を基底に構え, Aに行為者が, Bにその行為が埋め込まれる。それが, 許可や同意を求める使役になるメカニズムである。

また, この⑫を受けて行為者の立場に立って叙述されたのが⑬になっている。これによく似た複合形式として, 動詞の語幹と ‘pānā’ 「得る」による複合で可能を表すものがある。この不定詞との複合は, その動詞語幹のものとはほとんど変わらないともいわれるが, 先の ‘denā’ 「与える」と構造が同じであり, 「(許可を与えられて) 得た」という意味になる。つまり, 相手からの許可や同意があってその行為に及ぶことができるのである。行為を行うのはあくまで行為者だが, それに許可や同意が必要ということで, 「させて」という使役を使い, さらに命題を得るということで「もらう」を付ける表現に相当する。対する語幹型のもは, 日本語の「～し得る」のような, 中立的な可能を表すものになる。

(2) 未完了分詞

次に, 未完了分詞を使ったものを観察しよう。この未完了分詞も不定詞と同様, 直格形, 斜格形という二つの形態をもつ。直格形は第二動詞の主語として埋め込まれ, その主語と, 第一動詞, 第二動詞が性・数一致を起こす。一方の斜格形は, 未完了性を具現した「～しながら, ～して」に当たる副詞句を作るものが目立つが, 動詞複合としてもこの未完了分詞は重要な役割を果たしている。

a) 直格形

まず, 主語型のものとして, ‘jānā’ 「行く」と対義語の ‘ānā’ 「来る」の例を見てみよう。

- (14) umr ke sāth-sāth buddhi bhī baṛhtī jātī hai.
 年齢 の 共に 知恵 も 増える—未完了 行く—未完了 コー現在
 「年齢と共に, 知恵も増していつている。」

- (15) laṛkā paṛhtā ātā hai.
 少年 勉強する—未完了 来る—未完了 コー現在
 「男の子は, (前からずっと) 勉強してきている。」

‘jānā’ ‘ānā’ とともに, 「一て」形+「行く/来る」の用法とよく似ており, それぞれ発話時の時間軸上で「現在→未来」「現在→過去」の間の方向性を伴った継続を表す。ここで, 未完了分詞が使われている理由は, 「増す」「勉強する」という行為が, 「現在→未来」「現在→過去」の期間内で断続的に起こるからである。

また、「行く／来る」に続いて、‘rahnā’「続く」という動詞も動詞複合に使用される。これは「行く／来る」のように時間軸での方向性を帯びたものではなく、時間軸上の任意の時点で、その前後のある期間の、断続的な継続を表す。

- (16) roz hī koī-na-koī utsav hotā rahtā thā.
 毎日 小詞 何らかの 祭り なる—未完了 続く—未完了 コー過去
 「毎日何らかのお祭りが行われていた。」

- (17) kal din-bhar tez varṣā hotī rahī.
 昨日 日中 強い 雨 なる—未完了 続く—過去
 「昨日は日中強い雨が降っていた。」

(16) は、任意の「お祭り」が繰り返して行われる様態を表すので、未完了分詞が使用されても当然である。(17)でも、雨が降るという事柄が完結しているわけではないので、こちらも未完了分詞になってもおかしくはない。ともに「お祭りが行われる」「雨が降る」という非定形節が表す事柄が、主文の主語になり「続く」という構造を取っているのである。

ところで、これによく似た複合形式で語幹を取るものがある。そちらはいわゆる現在進行形で、現在進行中の事柄もしくは近い未来に予定として起こる事柄について使用される。しかしその語幹型は‘rahnā’の取る形態が完了分詞のみに限定されており、コピュラ動詞を付けていわゆる現在完了形の形で使う。それと比べて、この未完了分詞の場合はそのような制限はない。語幹型が時間軸のある一点での事柄の進行を表すものとすれば、その一点の進行が集合的に存在するものがこの未完了分詞型の複合形式である。

次に‘honā’（コピュラ動詞）を見てみよう。未完了分詞とコピュラ動詞の動詞複合とえば、現在時制を表す複合形式である。現在時制に対する単純形がないヒンディー語は、現在時制をこの複合形式で表している。

- vah roz yahāñ ātā hai.
 彼 毎日 ここに 来る—未完了 コー現在

そして、ここで取り上げるのは、この複合形式にさらにコピュラ動詞が付加されるというものである。その場合、命題側の定形になっているコピュラ動詞は、非定形の未完了分詞に変わる。

- (18) maim̃ ṭhik das baje ofis pahuñctā hūñ, tab roz
 私 ちょうど 10 時 会社 着く—未完了 コー現在 その時 毎日

cāy bantī hotī hai.

チャーイ 作られる—未完了 コー未完了 コー現在

「僕がちょうど 10 時に会社に着くと、いつもチャーイができているのだ。」

(18) のように、命題にもう一つコピュラ動詞を付加することによって、「チャーイができている」という命題に、「一のだ」を付けるのと同じ効果をもたせる。(18)は動詞述語文だが、以下のように形容詞述語文になると、いわゆる普通の真理を表すものになる。

baṛī hāni kī upekṣā choṭī hāni acchī hotī hai.

大きい 被害 の 比較 小さい 被害 良い なる—未完了 コー現在

これは「大きい被害より、小さい被害の方がましなものだ。」という具合に、命題文に「ものだ」を付けると分かりやすい。つまり、命題「AはB」にさらに、大命題の「X = [AはBな]のだ」「X = [AはBな]ものだ」という層が加わって、普通の真理に当たる意味を表すのである。もちろん、形容詞述語文だけではない。名詞述語文でも同じく普通の真理を表すものになる。

dharm manuṣy kā saccā mitr hotā hai.

ダルマ 人間 の 真の 友 コー未完了 コー現在

この文は、「ダルマ（法）は人間の真の友なのだ。」となる。「AはBだ」という命題が「Xのだ」もしくは「Xにある」という大命題に埋め込まれているために普通の真理の表現になるものと考えられる。

もう一つ、知覚構文の例を見てみよう。ここでは‘dikhāi denā’「見える」を使ったものを挙げるが、これは、動詞出自の抽象名詞‘dikhāi’に、‘denā’「与える」を複合して一つの語彙になっている複合動詞である。

(19) āge kuch āg jaltī hūi dikhāi de rahī hai.

先に 少し 火 燃える—未完了 コー完了 見ること 与える—語幹 続く—完了 コー現在

「先にちょっと火が燃えているのが見えるぞ。」

この(19)の場合、「Aが見える」の「A」に非定形節が代入されている。この非定形節内の動詞および主文の動詞の性・数は‘āg’（女性・単数）に一致している。

次は目的語型の埋め込みについてだが、ここで挙げるものも、(19)でも挙げた知覚動詞のう

ち、他動詞の ‘dekhnā’ 「見る」を使った例である。

- (20) maimne apane betē ko rotā (huā) dekhā.
 私+能格 自分の 息子 を 泣く—未完了 コ—完了 見る—過去
 「私は自分の息子が泣いているのを見た。」

ここで挙げた (20) は、埋め込まれる非定形節が、主文の目的語の位置に入り、表層上は目的語になっている非定形節側の主語と、その述語動詞である非定形の未完了分詞が性・数の一致を起こしている。実は、この一致を起こすパターンは標準文法に適用していないとされている⁵⁾。いわゆる標準文法に従うと、これは以下で例示する斜格形になるのが正しいとされている。また、() 内の ‘huā’ は非定形節の元の文になる「未完了分詞+コピュラ動詞」のコピュラ動詞の残骸である。これがなくても未完了分詞だけで、事柄の未完了性は十分発揮できるので、多々省略される。

b) 斜格形

では、次に斜格形を使用した主語型埋め込みの複合形式を挙げる。ここで挙げるものはイディオム化したもので、未完了分詞の斜格形と ‘bannā’ 「作られる (=できる)」の複合から成っている。

- (21) mujh se us kā ronā dekhte na banā.
 私・斜 よって 彼・斜 の 泣く—不定 見る—未完了 否定 作られる—過去
 「私には、彼が泣くのを見ていることができなかった。」

(21) で使用されている動詞 ‘bannā’ 「作られる／できる／なる」は、‘banānā’ 「作る」の中動態のような意味をもつ、いわば中動的動詞である。「作られる／なる」の「一れる」からも分かるように、これは「人 se A 受動複合形」もしくは or 「人 se A 中動的動詞」の A に節が埋め込まれている。その際、節内の動詞は未完了分詞の斜格形で表される。そして、これは否定文での使用が多い。その場合、「できない」という不能を表すような表現になるが、「その状況が（作ろうとしても）作れない」ということで、純粋に能力に依存するものではなく、心情が許さないという前提での不能の意味になる。

今度は目的語に埋め込まれるものの例を観察する。先の(20)で観察した知覚動詞のパターンだが、動詞の部分は斜格形になっている。

(22) unhoṃne ek sundar kanyā ko nāv calāte dekḥā.

その方+能格 1 美しい 娘 を 舟 漕ぐー未完了 見るー過去

「その方（シャーンタヌ王）は一人の美しい娘が舟を漕いでいるのを見た。」

(22) は、(20) の非定形節の動詞の形態を、直格形から斜格形に替えたパターンである。そして、こちらが (20) よりも文法に適っているとされる。非定形節の動詞述語に見られたコピュラ動詞の残骸（この場合は斜格形の ‘hue’）も、しばしば挿入される。

また、主語型の埋め込みのところで観察した (19) の知覚動詞「見える」で、「Aが見える」の「A」に代入されるのは直格形が普通で、この目的語型のように斜格形にすることはあまりない。

(3) 完了分詞

完了分詞の場合、未完了分詞と違って、主語型の直格形のは少なく、むしろ斜格形を使用する複合形式の方が多い。また、完了分詞にも、未完了分詞で使用されていた第二動詞がほぼ同じ様に使用される。なかにはイディオム化したものもある。先の未完了分詞との意味の違いに注意しながら見ていこう。

a) 直格形

完了分詞の直格形はあまりないが、その少ない中の代表的な動詞複合である受身の構文を以下に挙げる。ヒンディー語の受身は、第二動詞に ‘jānā’ 「行く」⁶⁾ を使用して表す。

(23) saṃf khānā khāne ke bād khāi jāti hai.

ウイキョウ 食べ物 食べるー不定・斜 の 後 食べるー完了 行くー未完了 コー現在

「ウイキョウは、ご飯を食べた後に食べられる。」

(23) の主語 ‘saṃf’ は女性名詞の単数形で、述語動詞もそれと性・数一致をしている。一般論として提示されているものなので、行為者は明示されていないが、特に必要がある場合は、日本語の「に（よって）」に当たるものとして、その行為者に ‘se’ ‘ke dvārā’ を付けて表す。

また、自動詞もこの受身の構文が可能なものがある。

(24) mujh se nahīṃ rahā gayā.

私・斜 よって 否定 いるー完了 行くー過去

「私はじっとしていられなかった。」

(24) の動詞 ‘rahnā’ は、この文脈では「(じっとして) いる」という自動詞だが、このように受身のパターンを取ると、「いられない」の「—られる」接辞が示すとおり、可能の意味が生じる。この自動詞の受身構文は、否定文での使用が多い。

また、同じ複合形式の例として、受身のように完了分詞の直格形を使ったものを以下に挙げるが、これは受身の意味にはならない。

- (25) are vah calā gayā.
 あら 彼 歩く—完了 行く—過去
 「あら、あいつ、行っちゃったよ。」

(25) は、‘jānā’ を第二動詞に使い、「行ってしまう、立ち去る」という、いわゆる複合動詞の典型とされるものである。‘calnā’ 「歩く、動く」は常に完了分詞となる。これはイディオムと化してしまっているが、第一動詞の完了分詞に見られるように、行為には既に着手しているわけで、完了分詞が使用されても納得がいく。イディオムとして形骸化しているものとはいえ、行為の完了が反映されているものと考えられる。また、同種の複合形式で ‘jānā’ の代わりに ‘ānā’ 「来る」を使った ‘calā ānā’ も存在する。例示は割愛するが、‘calā’ を第一動詞にもつことにより、「(ある地点から) やって来る」という意味になる。

次も同じ直格形の例だが、受身や (25) のイディオム化したものとは違うものである。

- (26) sukh kā sūraj dūbā jā rahā.
 幸福 の 太陽 沈む—完了 行く—語幹 続く—完了
 「幸せという太陽が沈んでいっている。」

(26) は、「太陽が沈む」という動きに着手した、つまり「完了した」状態と捉え、その事柄が進行していく様を表している。これが完了分詞を取るのも不思議ではないが、同時に未完了分詞を使った ‘dūbtā jānā’⁷⁾ の言い方も存在する。完了で捉えるか未完了で捉えるかは、話者の捉え方に依拠するものと推察される。

次の ‘rahnā’ 「続く」という動詞も、(16)(17) のような未完了分詞のみならず、完了分詞とも複合できる。未完了分詞の時の要領で、今度は完了した状態で持続する様を表す。

- (27) vah hardam pati tathā parivār kī sevā meṃ lagī rahtī thī.
 彼女 常に 夫 と 家族 の 世話 に 付く—完了 続く—完了 コー過去
 「彼女は常に夫と家族の世話に従事していた。」

節となっている命題「彼女が常に夫と家族の世話に従事した」という状態が持続している様を表すのが、この動詞 ‘rahnā’ である。

では次に、動詞の最たるものとしてコピュラ動詞 ‘honā’ との複合について観察してみよう。ヒンディー語では完了分詞をそのまま過去時制の定形として使用できるが、さらにそれにコピュラ動詞が付くことがある。それがいわゆる現在完了⁸⁾ となる。現在完了といえ、[完了, 継続, 経験, 結果]という相を想起するよう刷り込まれているかもしれないが、形態とその複合形式が語るところは、日本語の「して・いる／ある」つまり「した状態で・いる／ある」のみである⁹⁾。

この「完了分詞+コピュラ動詞」という複合形式は、当然、行為や事柄の完了を表しているのだが、ヒンディー語では、以下のように、その現在完了の命題にさらにコピュラ動詞を付けることがある。

- (28) vah jāpān āyā huā hai.
 彼 日本 来る-完了 コー完了 コー過去
 「あいつは今、日本に来ているよ。」

(28) のようにもう一つコピュラ動詞を付けることで、「命題の状態にある¹⁰⁾」とし、完了した現在の状態を強調する表現になる。ここは単に「[外に行った]状態にある」ではなく、「[外に行っている]状態にある」となっていると考えればよい。いささか冗長的に感じを受けるが、仮に「完了分詞+コピュラ動詞」の負っている意味を、完了, 継続, 経験, 結果, のように大別するならば、ここはあえて「いる」という部分を残しているわけだから、タイムスパンの長い「経験」やそのタイムスパンの一面を捉えた「結果」ではなく、現時点での「完了」そして「継続」を表していると考えることができる。つまり、現時点の前後に絞られた短いタイムスパン内での完了もしくは継続をこの複合形式に負わせ、役割分担させているのである。

もう一つ、他動詞の例を挙げてみよう。

- (29) dīvāroṃ par nakkāśī kī huī hai.
 壁 上に 彫刻 する-完了 コー完了 コー過去
 「壁に彫刻がしてある。」

これも、「彫刻を(すでに)している状態にある。」となっている。この文には「する」の行為者は明示されていないが、むろん、本来の命題には行為者が存在する。それを補うと、以下のようなになる。

kalākāroṃ ne dīvāroṃ par nakkāśī kī hai.

芸術家 能格 壁 上に 彫刻 する一完了 コー現在

上の文は、主語が補完され「芸術家たちが、壁に彫刻をした。」になっている。これは、ヒンディー語の代表的な構文に数えられる能格構文である。能格構文では、語の格表示が通常の対格動詞の場合と異なり、行為者が能格、目的語が絶対格で表示される。ヒンディー語は他動詞の過去時制（つまり完了分詞）に限り能格構文を取るが、その場合の述語動詞は、通常の主語ではなく、目的語の性・数に一致させる。前の(28)は、能格構文で絶対格として表示されている目的語の「彫刻」(女性・単数)を主語にした文である。文字通りは「して・いる=した状態にある」となっている。日本語では「状態にある」は冗長になるので、単純過去で止めざるをえないが、結局、この「芸術家たちが壁に彫刻をする」という命題のうち、人に焦点を置いて能動的な観点(《主語》が《目的語》を一している)から見るか、物に焦点を置いて中動的な観点(《目的語》が一してある)で見るかの違いを、前者は能格構文に、そして後者は(29)のパターンに負わせ、使い分けているのである。

また、ヒンディー語の能格構文では、行為者が能格表示されて、動詞の性・数を決定する権限を失い、代わりに目的語が動詞の性・数を決定する。この目的語と動詞の関係は「AがBをした⇒Bがされた」になっている。一見、能動的な文に見えるが、実際は、主語「芸術家たち」を視点とした文と、構文上の主語である「彫刻」を視点とした文が一つの文として表現されている文だということができる。そして、(29)の文は、目的語に焦点を当てた中動的な「彫刻がしてある」という文にさらにコピュラ動詞を加えて、現時点での完了、継続を強調しているということになる。

もう一つ主語型の埋め込みとして、未完了分詞のところでも見られた知覚構文の例を見てみよう。ここでは、‘dikhnā’「見える」という動詞が使用されている。

(30) koī peṛ ke nice baiṭhā (huā) dikh rahā hai.

誰か 木 の 下に 座る一完了 コー完了 見える一語幹 続く一完了 コー現在

「誰か木の下に座っているのが見える。」

(30)は(20)と構造は全く同じであるが、非定形節内の「座る」という行為は既になされたものであるため、ここは完了分詞が使用されている。

では、次に目的語型の直格形を使用するものを見てみよう。例としては‘cāhnā’「欲する」「karnā」「する」の二つが挙げられる。前者は先の不定詞のところでも触れたが、‘karnā」「する」は初出である。どちらも「欲する」「する」の目的語の位置に命題が埋め込まれるが、その

時の形態が直格形の男性・単数形と決まっている。まず、‘cāhnā’の例を見てみよう。

(31) ghaṛī bajā cāhti hai.

時計 鳴る—完了 欲する—未完了 コー現在

「時計が鳴ろうとしている。」

(31) は、近未来の意味を表す表現になっている。グル (Guru) によると、本来は「～することを欲する」という具合に、不定詞を目的語に埋め込んだものと同じ意味で使用されるということである [Guru: 268]。そうすると、不定詞と完了分詞のパターンが並存することになるが、実際、現代では願望を表すのは、名詞性の強い不定詞型の方が普通である。そちらの複合形式が願望表現に使用され、さらに近未来の意味まで表すというのは、話者の仮想世界での願望として捉えられるせいではないだろうか。もちろん「時計が鳴る」という事柄も、仮想世界では既に完了していなければならない。そのために完了分詞が使われているものと考えられる¹¹⁾。

もう一つの ‘karnā’ の場合も、同じ原理が働いているものと推察される。

(32) vah prāyaḥ vanoṃ meṃ ākheṭ ke lie jāyā kartā thā.

彼 いつも 森 に 狩り のため 行く—完了 する—未完了 コー過去

「彼 (王) は、いつも、森に狩りをしに行っていたものだった。」

構造上は「AがBをする」となる。命題の事柄は完了したものとして捉えられ、それを行うという状態を示すものである。これは、繰り返し起こる習慣的な行為や事柄を表すのに使用される。習慣を表す用法の「て形+いる/ある」以外に、日本語には「～する・こと/よう・にする」の「こと/よう」のような形式名詞を用いた言い方があるように、ヒンディー語でも習慣的な行為や事柄に対し、いろいろな言い方があるわけである。

最後に、知覚構文の例を挙げる。ここで出てくる動詞 ‘pānā’ は、通常「得る」という意味で使われるが、知覚の意味としては「分かる、捉える」に相当する。

(33) ...to āj ke bhārat ko bahut picḥrā huā pāte haiṃ.

小詞 今日 の インド を ととも 遅れる—完了 コー完了 得る—未完了 コー現在

「すると、(我々は)今日のインドがとても遅れていることが分かる。」

(33) も、未完了分詞のところでは挙げた知覚動詞と同じで、構造上「今日のインドがとても遅れている」という非定形節が、「得る」の目的語として埋め込まれている。その場合、未完了分

詞の目的語型埋め込みの例に漏れず、非定形節の主語が対格表示される。「遅れている」の「一て形+いる」は、「遅れた状態にある」という意味なので、完了分詞を取っても不思議はない。なお、この知覚動詞に関する埋め込みも、本来は直格形ではなく次項で例示する斜格形を使うのが普通とされている。

b) 斜格形

では、ここから斜格形について見てみよう。(23)では直格形を使用し受身を表したが、以下のように、第一動詞の形態が斜格形になると、受身構文ではなくなる。(4)(5)で見たような、未完了分詞の直格形を使用したものと同じで、完了した状態で事柄が進行していく様を表している。

- (34) laṛkā khāna khāye jātā hai.
 少年 食べ物 食べる一完了 行く一未完了 コー現在
 「男の子はどんだんご飯を食べて（いって）いる。」

未完了分詞の‘jānā’「行く」といっしょで、(34)は、「食べ物を食べる」という命題が完了状態（食べるという行為に着手済み）のまま進行していく様態を表す。第一動詞が他動詞の場合は、先の受身と区別しやすくするためか斜格形を使用するが、自動詞の場合は直格形になることもある。

次の文も未完了分詞の(46)や(47)とともに、未完了 vs. 完了の対立を起こしているものである。

- (35) jue ke mūl meṃ lobh ādi vikār chipe rahte haim.
 賭けの根源に 貪欲など心の乱れ 隠れる一完了 続ける一未完了 コー現在
 「賭けの根源には貪欲さなどの心の乱れが潜んでいる。」

(35)は、「隠れる」という行為が完了しているために完了分詞が使われているものと考えられる。このように、完了分詞の場合は第一動詞の行為がいったん完了しており、その状態が「続く」という構造になる。

(34)の‘jānā’ (35)の‘rahnā’は、未完了分詞と完了分詞の場合とで、相の点ではっきりした対立を成していることは明らかである。特に、用途の多い動詞‘jānā’については、完了分詞の直格形による複合形式が受身に使用されており、先に向けて「一て・いく」という場合の表現を斜格に負わせているところが、特記されるべき点である。

もう一つ、完了分詞には‘rakhnā’「置く」という動詞と複合形式も存在する。これは、本稿で扱っていないが、語幹との複合形式があり、その場合は命題を予めしておく（「一て・お

く」に類似した) というような準備性もしくは予め用意しておき今その状態にあるという静態性を表す。完了分詞と複合する場合、他と同じで第一動詞の行為が確実に完了していることを表す。これも、完了分詞の形態が斜格形になる。

- (36) *ṭhīk, ise mazbūṭī se pakare rakhnā.*
 よし これを 力 よって つかむ一完了 置く一不定(命令)
 「よし、これをしっかりつかんでおけ。」

(36) は、ただ「つかんで・おく／いる」というのではなく、「つかんだ^まままで・おく／いる」になっていると考えればよい。日本語は三項以上の動詞連続を避け、形式名詞（ここでは「まま」）を使うが、ヒンディー語は専ら動詞を使って表す。

次に不定詞のところでも観察された動詞 ‘denā’ 「与える」の動詞複合を見てみよう。この場合も、完了分詞は斜格形になるが、実際、完了分詞と複合するとどのようなニュアンスに変わるか見てみよう。

- (37) *maiṃ tumheṃ ek sthān kā nām batāye de rahā hūñ.*
 私 君に 1 場所 の 名前 伝える一完了 与える一語幹 続く一完了 コー現在
 「私がおまえにある場所の名前を教えてやろう。」
- (38) *yadi yah bāt hai, to maiṃ abhī karṇ ko rājpad par pratiṣṭi*
 もし この 話 コー現在 小詞 私 たった今 カルナ を 王位 に 据えられた
kiye detā hūñ.
 する一完了 与える一未完了 コー現在
 「もしそういうことなら、たった今カルナを王位に付けてやろう。」

(37) (38) に見られる複合は、日本語の「一て」形+「やる／あげる」に相当するものである。文脈によっては、語幹の動詞複合にも「一て+やる／あげる」と訳すのが可能なものがあるが、語幹の場合は本来「自分自身が行為を発する」というニュアンスを加えるもので、実際、相手の存在を意識して、相手の利益になる行為を発するのは、この完了分詞との複合によるものである。完了分詞を使う理由としては、完了性をもたせることで、話者自身の中では、その行為自体は完了しているものと認識しているものと考えられる。

最後に、先の未完了分詞のところでも出てきた、知覚構文の例を観察しよう。

- (39) *maiṃne ek baṃḍar ko peṛ ke nice baiṭhe dekhā.*
 私+能格 1 猿 を 木 の 下に 座る一完了 見る一過去

「私は木の下に一匹の猿が座っているのを見た。」

(39)の動詞は再び「見る」になっているが、先の(33)と同じ構造を取っている。非定形節の主語で、主文内で対格表示されている「猿」は、「座った状態にある」のだから、完了分詞が使用されるのが自然であることは言うまでもない。先にも述べたが、知覚動詞の目的語型埋め込みでは、斜格形を取る方が普通とされている。

3. 不定詞、および未完了分詞、完了分詞の特徴とその機能

以上、ヒンディー語の非定形動詞である、不定詞、未完了分詞、完了分詞について、例を挙げながら観察し、考察を加えた。ここでは、それらの3つの形態についての特徴をまとめてみたい。特に、ヒンディー語でよく見られる構文にも絡むものについて、以下で改めて解説する。

まず、不定詞の直格形についてだが、与格構文に代表される主語埋め込みにしても、その他の目的語埋め込みにしても、時制や相の干渉を受けない。というのは、直格形は名詞性が強いものだからである。言い換えれば、ヒンディー語の不定詞の直格形は、動名詞としての機能を負っているといえる。したがって、主語型、目的語型ともに、普通の名詞が埋め込まれる場合の論理構造と同じで、後続の第二動詞との密着性は高くない。意味解釈の場合に語学で説明される「強制、義務、必要、予定」等々は、解釈の段階で生じる問題で、あくまで第二動詞はそれぞれの原義に基づいた意味をもっているだけである。顕著な例として、コンピュータ動詞を使う場合と‘paṛnā’を使う場合の存在文を見てみよう。

mez par kitāb hai.

机 上に 本 コー現在

mez par kitāb paṛī hai.

机 上に 本 落ちるー完了 コー現在

どちらも「机の上に本がある。」という日本語訳になる。下の文は完了分詞とコンピュータ動詞による現在完了の形を取っている。上のコンピュータ動詞の文は中立的な存在文だが、‘paṛnā’が入ると、「誰か／何かの力が働いて、(落ちた／置かれた状態に)ある」となる。この動詞がもつ、背後にある他力の介在が、名詞の代わりに動名詞的な直格形を代入する時、不可避な行為や事柄を実行せざるを得ないという強制的の意味につながるのである。

また、通常、この直格形は、男性・単数形の‘-nā’語尾のままで使用するが、(6)で挙げた例を見ても分かるように、非定形節の‘hiṃdī bolnī」「ヒンディー語を話す」の‘bolnī’

「話す」は、‘*himḍī*’（女性・単数）との性・数一致を起こしている。グプター（*Guptā*）によると、この非定形節内での性・数一致は、デリー方言で起こる現象で、標準ヒンディー語では起きないということである [Guptā: 425-426]。したがって、(6) の文も、本来なら男性・単数形の ‘*bolnā*’ 「話す」のままで、以下の通り ‘*himḍī bolnā*’ で埋め込まれるはずなのである。

mujhe himḍī bolnā ātī hai.
 私に ヒンディー語 話すー不定 来るー未完了 コー現在

この性・数一致の変化は、元々名詞と形容詞、もしくは名詞と一種の形容詞的な働きをする動詞の未完了分詞、完了分詞との間で起こる現象であり、主文内に限られている。したがって、動名詞としての働きをする直格形は、本来なら変化する必要はない。しかし、不定詞の直格形の場合も、非定形節内での一致を起こすのが普通になってきている。氏によると、これはパンジャブ語の影響によるものということである [Guptā: 426]。たしかに、それも一要因であろうが、この不定詞に未完了分詞と完了分詞に準じた形容詞的な働きをもたせているものと考えられる。

一方の斜格形だが、こちらは名詞性もなく、性・数一致を起こすこともない。したがって、名詞、形容詞のような文の要素にはならないが、逆をいえば、(10) の ‘*lagnā*’、(12) の ‘*denā*’ のような後続の第二動詞との密着度を上げたものであることを示している。ただし、意味の上では、前者は「[行為や事柄] に着手する」、後者は「[行為や事柄] を与える」という動詞がもつ本来の論理構造が反映されているのである。

残りの未完了分詞および完了分詞は、それぞれ未完了 vs. 完了という相の対立を形式としてもっている。そして、後続の第二動詞は、それぞれ、非定形節として埋め込まれる命題がどのような状態にあるかを語る部分になっていた。実際、第二動詞に使用される動詞は、おおよそ未完了分詞、完了分詞のどちらにも共通したものが多い。

未完了分詞、完了分詞の直格形の主語型埋め込みでは、第二動詞に ‘*jānā*’ 「行く」 ‘*ānā*’ 「来る」 ‘*rahnā*’ 「続く」が共通で使用されていた。この3つの動詞に共通しているのは、「継続」という概念だが、もちろんそれぞれの動詞の原義にちなんだニュアンスを併せもっている。‘*rahnā*’ については、未完了対完了の相の対立を反映した状態で、その状態が「続く」となっていた。これは対と考えるとよい。また、‘*ānā*’ は、未完了分詞との複合で、日本語の「～してくる」と同じような表現になる。完了分詞との複合はイディオムの中でしか見られない。最後の ‘*jānā*’ は、未完了分詞の方が「～していく」になるが、完了分詞の場合は、受身を表す複合形式になっている。若干この動詞の場合、未完了と完了の対が成立しない。完了としての対を成す「～した状態で行為や事柄が進行していく」の方は、主に斜格形が負っている。動詞によっては直格形でも構わないものもあるが、それはその動詞が受身用として直格形

との複合形式を予約しているかどうかにかかっているものと推察される。例を挙げれば、‘rakhnā’「置く」は受身にも使用される動詞であるためか、斜格形の方に「行為が完了した状態のまま」という意味での「一て+おく」を負わせている。おそらく、優勢なのは受身の方で、この「継続」ではないことは想像に難くない。

また、未完了分詞、完了分詞の主語型埋め込みおよび目的語型埋め込みを共通に使用していた知覚構文についてまとめてみると、日本語でいえば「電車が走っているのが見える」「鳥が鳴いているのが聞こえる」のように、準体助詞「の」を使って従属文の「電車が走っている」「鳥が鳴いている」を埋め込むが、ヒンディー語は、その行為や事柄が未完了であるか完了であるかに応じてこれらの未完了分詞、完了分詞を使用し、非定形節として埋め込む。「見える」対「見る」を例にとると、主語型の場合、(19) (30) のようにその動詞の直格形が主文の主語として埋め込まれる。一方の目的語型の場合は、未完了分詞であれ完了分詞であれ、非定形節の埋め込みの場合、斜格形を使うのが普通だが、昨今では(20) (33) のように直格形のまま埋め込むこともある。

もう一つ、未完了分詞、完了分詞の主語型埋め込みとなるコンピュータ動詞についてもまとめておこう。未完了分詞の場合を見ると、既に現在時制を形成している複合形式にさらにコンピュータ動詞を加えることで、非定形節となる命題に「の／もの+だ」という「Aだ」という命題を付け加えることになる。反対に完了分詞は、既に現在完了の複合を形成しているものに、さらにコンピュータ動詞を付加することで、「～した状態にある」という現時点での完了を強調するものになる。

全体を通して見てみると、この不定詞、未完了分詞、完了分詞を使った動詞複合は、統語上の「文→非定形節→主文への埋め込み」という操作で説明がつく。文自体、見た目1層に見えても実は、2層から成っていることがはっきり分かる。そして非定形節として埋め込まれる時、不定詞の直格形は名詞性の強い、動名詞的なものになる。したがって、特に相とは関係がない。その他の未完了分詞、完了分詞は、それぞれ未完了、完了の相を反映しており、同じ第二動詞が使用される場合でも、その非定形節の表す命題が未完了か完了かで、きちんと使い分けられているのである。

4. ま と め

これまで伝統文法で説明されてきたヒンディー語文法は、あくまで母語話者向けに書かれたものである。そのなかで、不定詞の動詞複合に対して提示される「必要、必須、強制、予定」等の意味や、未完了分詞および完了分詞の動詞複合で説明される「継続、習慣」等の意味は、文の解釈の上では役立つが、言語運用の点では少々問題が残る。というのは、母語話者の場合はその使い方を既に知っているのものでそれでよいが、非母語話者にとっては、その前段階、つま

りヒンディー語がもつ統語構造のメカニズムから理解しなければ、言語運用に至れないという大きな落とし穴があるからである。

本稿で扱った不定詞、未完了分詞、完了分詞と他の第二動詞の動詞複合は、統語的な埋め込みから成り立っている文なので、まず第二動詞として使用される動詞の原義をよく理解する必要がある。それが欠けていると、たとえば「未完了分詞+‘rahnā’=継続」という公式ができてしまい、逆に「継続」なら何でもこの形を当てはめかねなくなる。非母語話者の定めともいえる過剰適応だが、それはどのようなメカニズムで運用されているかを理解していないことに起因している。本稿での考察、分析で明らかになったこの種の動詞複合のメカニズムが、非母語話者にとって言語運用の助けになることを期する。

略語：未来時制=未来，現在時制=現在，過去時制=過去，命令法=命，仮定法=仮，未完了分詞=未完了，完了分詞=完了，不定詞=不定，不変化詞=不変化，コピュラ動詞=コ，斜格=斜，接続分詞=接続，同格接続詞=同接，否定辞=否定，形容詞=形（なお，名詞の人称，数，性は省略）。

翻字：① t̪/d̪/n̪/ɽ̪ はそり舌音。② c は [tʃ]。③ m (= ñ/ñ/n/n/m) は鼻音記号，ñ は鼻母音記号。④ 子音 + h は有気子音 [Cʰ]。⑤ ś は摩擦音 [ʃ]。⑥ r は母音。

注

- 1) Urdu とは元々トルコ語で「軍隊」という意味で、ガズニ (Ghazni 962-1186) 王朝の頃、軍隊で話されていたことばがその母体になっているといわれている [Sachau: ii p. 258]。
- 2) 例文の引用文献は、文語と口語が混在しているが、ヒンディー語における口語と文語の差は、たとえば、日本語における大和ことばの「学ぶ」と漢語の「学習する」といった具合で、主に語彙レベルのものである。したがって、この区別は本稿の主旨に関係していないので、個々の例文の後にその出典を明記するのは割愛した。
- 3) これは元々助動詞「べし」の連体形であるが、現代語ではすでに名詞としての意識が強くなっているものと推察される。その点では、先に挙げた、動詞出自のヒンディー語の不変化詞‘cāhie’によく似ている。
- 4) 主文と非定形節の主語が異なる場合（例えば「私は母に早く帰ってきて欲しい。」）は、ヒンディー語では非定形節の埋め込みによらず、同格接続詞を伴った複文（[Sentence 1] 同格接続詞 [Sentence 2]）の構造を取る。
- 5) このパターンは、デリー辺りで話されるビジン・ヒンディーでよく使われるようである。
- 6) 補助動詞的に使用されているが、以下、メタ言語は原義の「行く」のまま表記する。
- 7) ‘ḍūbtā jā rahā hai dil merā’ 「沈んでいく、この心」（映画『Dil Ka Rishta』より）で、未完了分詞の複合が使用されている。
- 8) 過去完了や未来完了も同じく、コピュラ動詞が時制をつかさどる。
- 9) 筆者の考えでは、短い時間幅でも成立する完了が出发点にあり、それが長い時間幅をもってくると、継続、経験になる。「結果」というのは、時間幅の長短に関係なく、連続した行為や事柄の最後の面だけを現在の時点から眺めた場合に発生する意味である。したがって、複合形式が表す意味は、その時間軸上の幅の広がりおよびそれをどの面から捉えるかに依存しているのである。
- 10) 日本語は「して・いて・いる／ある」のように動詞連続にはならないので、形式名詞の「状態」で補う。
- 11) 仮定の出来事に対し日本語でも「～すれば」の「れば」形と「したら」の「たら」形を使用する。前者が未完もしくは未来のことを示すとすれば、後者は仮想の世界で完了したのものとして捉えているの

によく似ている。

引用文献

- Jagannāthan, Vi Rā *Prayog aur prayog*. Oxford University Press, Dillī, 1981.
Kohli, Droṇvir & B Śarmā, Narendr (ed.) *Bāl Bhārtī* (December 1971).
Paṭiyālā Hāus, Naī Dillī, 1971.
Gāndhī, Mohandās Karamcaṃd *Hind Svarāj*. Navjivan Prakāśan Mandir, Āmdabād, reprinted 1987,
1922.
新村 出 編 『広辞苑第四版』, 岩波書店, 1993。
Vyathihṛday, Śrī *Mahābhārat kī śreṣṭh kahāniyāṃ*. Sunil Sāhity Sadan, Dillī, 1998.

[映像資料]

Dil Ka Rishta Director Naresh Malhotra 2002 TIPS.

参考文献

- Dahl, Östen *Tense and Aspect Systems*. Basil Blackwell, UK, 1985.
Dik, Simon C. *Functional Grammar*. North-Holland Publishing Company, Amsterdam, 1978.
Guptā, Manju “Hiṃdī- Dillī” in Jagannāthan, *Prayog aur prayog*. Oxford University Press, Dillī, 1981.
Guru, Kamtāprasād *Hiṃdī vyākaraṇ*. Nāgarīpracāriṇī Sabhā, Vārāṇasī, 2035 (1978?).
Hopper, Paul J. & Traugott, E.C *Grammaticalization*. Cambridge University Press, Cambridge, 1993.
Jagannāthan, Vi. Rā. *Prayog aur prayog*. Oxford University Press, Dillī, 1981.
Kellogg, S.H. *Grammar of the Hindi Language*. Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd. Second
Edition, reprinted 1990, 1893.
古賀 勝郎 『基礎ヒンディー語』大学書林, 1986。
近藤 達夫 「日・英語のいわゆる受動文・使役文・難易文について — いわゆる引き上げ (Raising)
の一般化—」『言語の視界』大学書林, 1987。
三上 章 『現代語法序説』くろしお出版, 東京, 1972。
Sachau, E.C. *Alberuni's India 2 vols*. Routledge and Kegan Paul Ltd. London, 1888.
Seuren, A.M. *Operators and nucleus: a contribution to the theory of grammar*, Cambridge University Press,
London., 1969.
Varmā, Dhirendra. *Hindī bhāṣā kā ithās*, Hiṃdustānī Ekeḍemī, Prayāg, 1933.

On the Verb Compounds in Hindi

— The functions of Infinitive, Imperfect Particle and Perfect Particle —

Miki NISHIOKA

South Asian areal linguists mostly have more attention on so-called compound verbs, i. e., stems with finite verbs, rather than on what we call verb compounds, which consist of infinitive, imperfect participle and perfect participle with finite ones. However, from the point of view of learning Hindi as a foreign language and understanding the grammar of Hindi properly, they should be taken up for discussion equally as well.

In this paper, we attempt to investigate the mechanism of verb compounds in Hindi, using a syntactic

framework of embedding non-finite clauses. And we also analyze various structural examples such as the dative construction, passive construction and the construction with verbs of perception.

We hope this paper will help Japanese to learn Hindi syntax and logic to develop language performance. The table of contents of the paper is below:

1. Introduction
2. Analysis of Verb Compounds Examples in Hindi
 - (1) Infinitive
 - a) Non-Oblique Form
 - b) Oblique Form
 - (2) Imperfect Particle
 - a) Non-Oblique Form
 - b) Oblique Form
 - (3) Perfect Particle
 - a) Non-Oblique Form
 - b) Oblique Form
3. Features and Functions of Infinitive, Imperfect Particle and Perfect Particle
4. Conclusion
- References

Keywords: verb compounds, embedded clause, infinitive, imperfect particle, perfect particle